中平（なかだいら）古墳群

【所在地】岐阜県伊揖斐郡大野町字古川
【築造時期】６世紀後半～７世紀中頃

古墳群の位置　濃尾平野最奥部の山嶺を構成する石山（頂上部は石灰採掘で喪失）から南に下る山麓緩斜面に分布する。1.5km 東方には根尾川が流れる。約 100m 上方には雁俣（がんまた）古墳群（時期不詳）が展開し、約 300m 西方には宮東（みやひがし）古墳群（６世紀後半～７世紀前半）が展開する。福塚（ふくづか）古墳（大型方墳）や宮東４号墳（円墳）の存在から、中平古墳群を含めた周辺地域は、古墳時代終末期の首長墓・有力者層の共同墓域と考えられている。

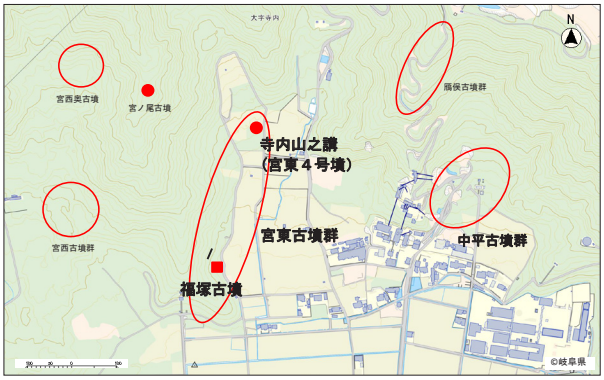

図１　古墳群位置図

古墳群の概要　今回図化した３基を含む 14 基で構成される古墳群である（大野町史跡）。なお、３号墳は古川神明神社社殿建設時に破壊されている。いずれの古墳も葺石などは確認できておらず、遺物も出土していないことから年代の確定には至っていない。14 基の構成古墳のうち５基（１～５号墳）は従来から知られていたが、９基の古墳は岐阜県 CS 立体図の判読により新たに確認された。いずれも石室石材が抜き取られ痕跡を残すのみである。新規発見のうち３基は、小川が流れる谷を挟んで東側に展開するため、支群もしくは別の古墳群とみることもできる。

墳丘が残存する古墳はいずれも円墳と考えられていたが、４号墳は方墳の可能性が高まった。砂防えん堤により改変を受けており墳形は判然としないものの、１辺約 16 ｍに復元できる。開口部前面には平坦部が発達しており、墓道（ぼどう）もしくは基壇（きだん）部と推定される。基壇部は通路幅約４ｍに復元でき、基壇部を含めた古墳の規模は１辺約 20 ｍに復元できる。

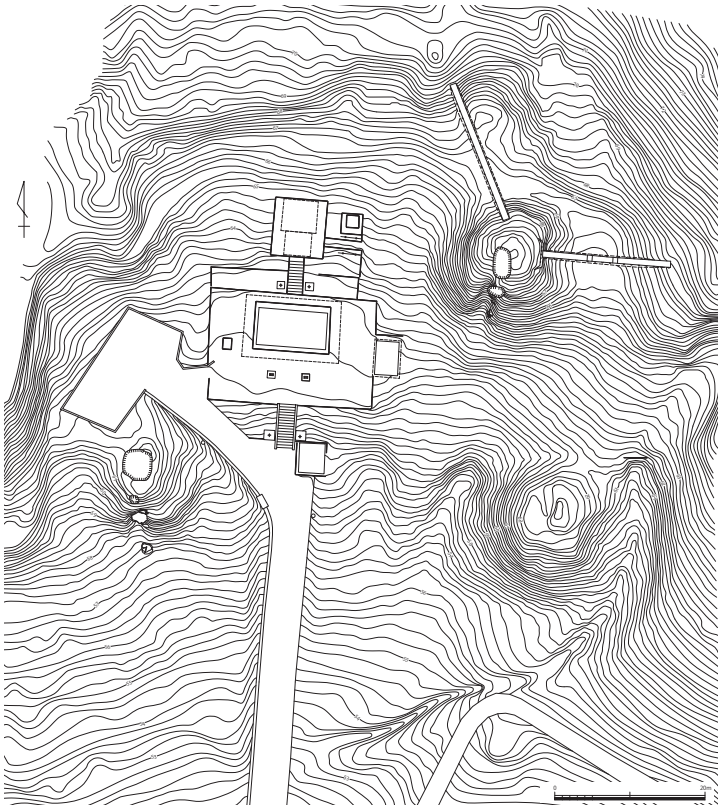

図２　古墳群全体図（S=1/1000）

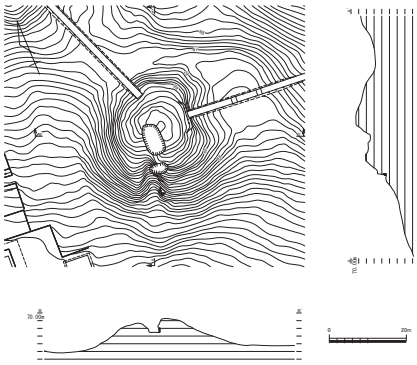

図３　４号墳墳丘図（S=1/200）

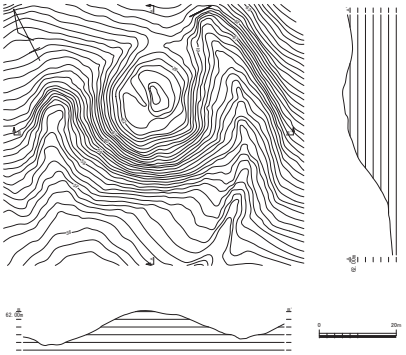

図４　５号墳墳丘図（S=1/200）

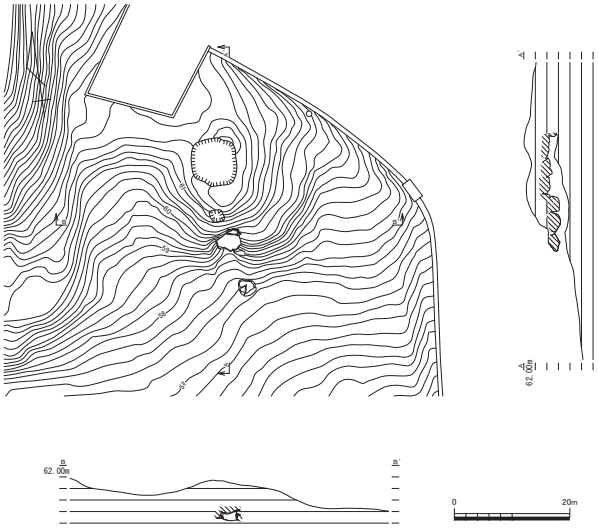

図５　１号墳墳丘図　（S=1/130）

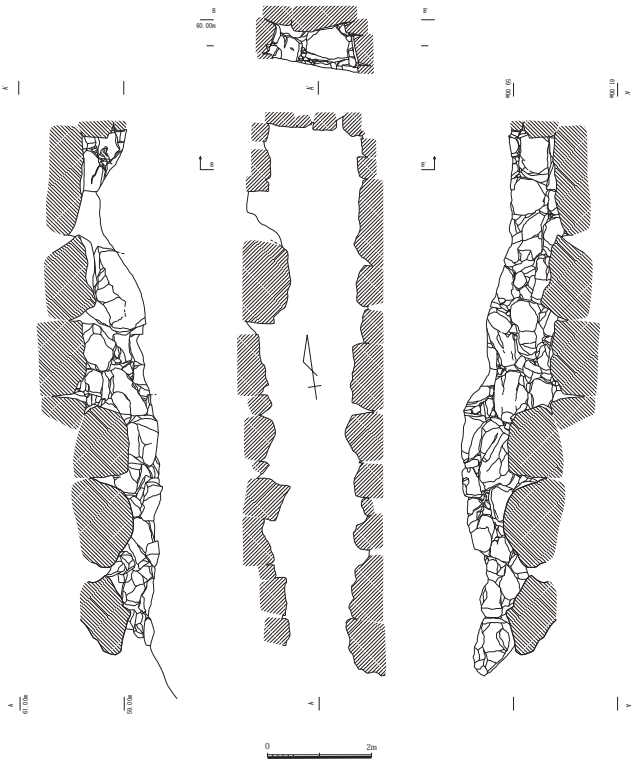

図６　１号墳石室図（S=1/150）

横穴式石室　１号墳の石室は右片袖（かたそで）式石室で南向きに開口する。現状で開口部は幅約 1.3m を測る。羨門（せんもん）付近は失われており全容は不明である。羨道（せんどう）はやや短く、未発達であった可能性もある。前庭部（ぜんていぶ）は改変をうけているため判然としない。

玄室の平面形は長方形で長さ約９m、最大幅約 1.6m、高さ約 1.1m である。流入土により天井石近くまで埋まっているため数値はいずれも現状である。石材は地元で産出するチャートや石灰岩を使用している。地元住民によると 40 年ほど前までは小学生が立って石室内に出入りできたという。

４号墳の石室は南西向きに開口する。現状で開口部は幅約 1.6m を測る。流入土や天井石の崩落によって立ち入りできず内部構造は不明であるものの、開口部から天井石と羨道部の一部石材が確認できる。1 号墳と比べて前庭部の石材がやや大きめである。石材は 1 号墳と同様に地元で産出するチャートや石灰岩を使用している。

古墳群の意義　大野町（旧大野郡）内では、古墳時代前期から造墓活動が活発に行われていたものの、首長墓系譜が野古墳群（５世紀初頭～６世紀前半頃）以降は確認できていなかった。しかし近年、横穴式石室を有する室塚（むろづか）古墳が前方後円墳であることや福塚古墳が大型方墳と判明するにつれ、その後に築かれた首長墓の存在が指摘されていた。今回の測量調査によって墳丘が残存する３基の古墳と中平１号墳の横穴式石室は、さらにその前後を埋める古墳として期待できる。

それぞれの墳形や規模、築造時期などは今後さらなる調査が必要であるものの、古墳時代終末期の地域社会のあり方を考えるうえで欠かすことができない古墳群であると同時に、福塚古墳との関係性やカイト古墳群や滝谷古墳群といった北部山麓地域に広く分布する群集墳との関係が注目される。

【参考文献】
岡田勝幸・中井正幸 2023「福塚古墳・宮東４号墳」『古墳解説シート』 大野町教育委員会
竹谷勝也　2009 『大野町遺跡詳細分布調査報告書　資料（考古）編』大野町文化財調査報告書第５集　大野町教育委員会
中井正幸　2024「美濃における終末期古墳の特性とその背景」『岐阜聖徳学園大学紀要〈教育学部編〉』第 63 集

編集：科学研究費基盤研究（Ｂ）「三関周辺における古墳時代から古代の地域動態に関する総合的研究」
(22H00712) 2023 年度（岡田勝幸）
発行：大野町教育委員会